哲學研究　第百三十三號　第十二卷　第四冊

左右田博士に答ふ

西田幾多郎

哲學研究第百二十七號に掲載せられた左右田博士の論文を讀み、私は近頃始めて理解あり權威ある批評を得たかに思ふ。今間を得て、私の考へる所を述べ、更に博士の高敎を乞ひたいと思ふのであるが、詳細に私の考を述べるのは私の今後の論文に讓りたい。「場所」の終に於て、私は多少從來と異なつた考に到達し得たかと思ふ。無論、それは他から見て何等の價値もない私の幻覺に過ぎないかも知らぬが、私は今後姑くその立場によつて、私の考を精練し發展して見たい。今は唯私から見て博士の批評の由つて起る根抵と思はれるものに對して、私の考へる所を述べて見ようと思ふのである。

一

私は先づ知識とは如何なるものなるかを問題として見たい。知識を問題として、之について何事かを明にすると云へば、それは既に知識である、眼は眼を見ることはできないと云へば、それまでのことであるが、私は我々が知識といふものの中に於て、少くとも種々の種類があり、種々の次位を區別し得ると思ふ。先づ客觀的對象を認識するといふことゝ、主觀的作用を反省するといふことゝは、同じく知識と云ひ得るとしても、同一の範疇に屬する知識ではない、或意味に於ては、寧ろ相反する立場によつて成立する知識とも云はねばならない。主觀的作用を反省し之を知るといふことは、尙何等かの意味に於て之を對象化すると云ひ得るかも知れない。反省的知識の對象として之を認識するとも云ひ得るであらう。併し批評哲學の知識といふ如きものに至つては、更に一層高い立場の上に立つものと考へざるを得ない。同一の立場に立つ知識を以て、同一の立場に立つ知識を反省し批判することはできない。知識が知識自身を反省するといふことは、知識が知識自身を越えて何處までも深い立場に立つといふことでなければならぬ。斯く知識に種々の次位が認められ、最後

に知識自身を反省し批判する知識も知識と云ひ得るならば、それは如何なる意味に於て知識と云ひ得るか。批評哲學の立場に於ては、更に何等か高次的なるものが加はつて來なければならぬとするならば、それは如何なるものであらうか。

理論理性によつて知るといふことゝ、理論理性が自己自身を反省するといふことゝは同一でない。避くべからざる循環と云つても、避くべからざる循環と知つた時、それは單に同じ所に還つたといふ事ではない。同じ所に居たゞけではそこに還らなければならぬと云ふことを知ることはできぬ。我々が何か考へれば、少くも形式論理の形式に當嵌まらなければならないのは云ふまでもない。併しさう云つてしまへば、すべての知識は同一になつてしまふの外はない。而も知識は單なる形式論理の形式によつて成立するものではない、內容との結合によつて客觀的となるとはカントも力說した所である。批評哲學といへども、それ自身の內容を有つて居るのである。知識の形式を批評するといふ時、既に形式が內容となつて居る。無論論理の形式以上の形式があると云ふのではない。併し形式によつて考へるといふことゝ、形式自身の自省といふことゝは同一でない。論理の形式を內容として考へる知識は、又論理の形式によつて成立すると云つても、それが空虛なる詭辨に終らざるか

ぎり、そこに新しい知識の意味がなければならぬ。自覺も知識であると云つても、單に對象を認識するといふ知識と同一立場の知識ではない。批評哲學の知識が既に單なる對象の認識以上の立場に立つことが許されるならば、かゝる立場は何處まで深め得、何處まで以上は深めることができないであらうか。所謂知識を批評する知識の立場、卽ち自覺的立場はそれ自身の積極的立場を有つてゐなければならぬ。而してその立場は、單に形式によつて對象を構成するといふ知識の立場ではない。我々の眞の自覺とは如何なるものであるか。自覺は自覺自身の內に深く反省して見なければならぬ、批評哲學の知識は此の立場の上に立てられるのである。斯く云へば、更に自覺を自覺する知識の立場がなければならぬではないかと云はれるかも知らぬが、かゝる疑問は自覺を對象的知識と同一に考へるから起るのである。自覺に於て深く自覺自身の中に反省するといふことは自己自身の外に出ることではない。自覺には深淺と種々の段階とを考へることはできるであらう。併し自覺の自覺といふ如きは空虛なる言辭に過ぎない。

カントは數學や純粹物理學が如何にして可能なるかを明にした。併し此等の對象的知識を批評する批評哲學其者の立場を明にしてゐない。理論理性によつて認

識するといふことゝ、理論理性其者の自省と相異なることが許されるならば、理論理性自身の自省の據つて立つ立場とその形式とが示されねばならぬ。批評哲學は如何なる立場によつてその一般妥當性を要求するか。體驗は認識以前と考へられるが理論理性の自省其者が既に體驗の一種ではなからうか。自覺といふことは單に心理學的事實ではない、單に心理的事實としては自覺の意識は出て來ない。私は自己を形而上學的存在と考へることすら、自覺の意識と矛盾すると思ふ。カントの後に出たフィヒテやヘーゲルの哲學が形而上學に陷つたといふ非難は何處までも辨護することはできないが、又單に之をカント以前の形而上學に逆轉したと考へるならば、早計たるを免れない。

二

知るといふことは一樣ではない、私は知るといふことに、少くとも根本的に相反する二つの方向を區別せねばならぬと思ふ。一つは對象認識の方向であり、一つは自覺の方向である。同じ對象認識の方向と云つても、限定的判斷による自然界の認識と、反省的判斷による合目的的世界の認識とは、既にその認識形式を異にして居なけ

ればならぬ。後者は既に自覺的形式の方向に傾いたものである。況して心理的現象界の認識、更に進んで歴史的世界の認識といふ如きものに至つては、此等も一種の對象的認識と云つても、更に一層自覺の形式に近づいたものでなければならぬ。此等の立場の推移は單に同一の方向を進めたものではなく、新なる立場を加へて行くのである、一々の場合に立場の超越があると云ふこともできる。併し超越と云つても、知識の外に出て行くといふことではない、すべてが自覺の中に包まれて居るのである。

自覺といふのは、知るものと知られるものとが一であると、對象的に認識することではない。自己同一といふのは、自己同一と、對象的に自己を同一として認識するといふことではない。若し斯く考へれば、自己といふものではなくなるのである、同一といふことゝ自己同一とは一つでない。眞の自己同一の意義は、私が從來の論文に於て云つた如く、作用の自覺(作用の作用)の方向に求めて行かねばならない。而して更に作用といふことを判斷意識の立場より「働くもの」に於て論じた如く考へ得るならば、眞の自覺の意識は述語的一般が無となること、卽ち眞の無の場所に求めなければならない。此等の點に關する詳論は他日に讓りたいと思ふが、述語的一般が對立

的無として限定せられ得るかぎり、尙所謂知識的自覺に屬するが、更に之を越えて眞の無の場所に到る時、意識的自己を忘すると考へられると共に、自己自身の直觀として眞の自覺に到達するのである。cogito ergo sum の sum を存在と考へるならば、自己を對象的に形而上學的存在と見ることであり、それは眞の自己といふものではなくなる。カントの意識一般といふ如きものは、之に反し自覺的意識の自己反省の方向に於て見られるものたるは云ふまでもないが、單に客觀的對象界の綜合統一の意識としての意識一般は、尙ほ徹底せる自覺ではない。この立場を越ゆれば、知識はないと云はれるかも知らぬが、それではカントの批評哲學は何であるか。意識一般を越えて對象的認識の意味の知識が成立し得ないことは云ふまでもないが、カントの批評哲學も亦意識一般の立場に於て構成せられたものとは云はれまい。

我々の意識の自覺的方向は、意識一般の立場に止まるものではない。その最も深い底は私の所謂眞の無の場所たる直覺的自覺にあるのであるが、その中間に於て意志的自覺を見ることができる。意志的自覺は判斷的自覺よりも深く、之を內に包んだものである。對象的認識の方向に於て意志を認識することはできぬ。意志の意識を全然否定するならばとにかく、苟も之を認めるならば、之を對象的認識の方向に

於てするのではなく、自覺の奥に於てするのでなければならぬ。我々の自覺の奥に意志的自覺の立場を見ることによつて、對象界に心理的意志を認識することができるのである。心理學的現象界、歴史の世界を客觀的に認識するといふのも、斯の如く自然界認識の立場よりも一層深い立場を自覺の底に見出すことによつて可能となるのである。後者の立場をも意識一般といふならば、意識一般にも種々の意味がなければならぬ。意識一般は、意志的自覺の方向に自己を深めることによつて、種々の對象界を見ることができるのである。

我々が意志する事を知るといふから、否直觀するといふことをすら知ると考へねばならぬから、理論理性が最高であると云ふならば、知識といふ語の意義の問題とならねばならぬ。さういふ場合の知るといふことは、意識一般によつて對象を認識するといふこととは違ふのである。さういふ意味の知るといふ立場は、知識が知識自身を自省する立場であつて、かゝる意味に於ける知るといふ中には、意志することも、直觀することも含まれて來る。それは判斷意識といふものではなく、我々の自覺的意識の立場に於て深く反省せられたものでなければならぬ、意識を對象とする意識でなければならぬ。意志するといふから直に作用といふことゝ同一視せられるが、

意志といふことは、意識の外から働くといふことでないのみならず、内から働くといふことでもない、自覺の一樣相である。かゝる自覺の立場よりして、判斷的知識に對して意志の優位が考へられるのである、更にその上に直覺といふものも認めねばならぬのである。

三

以上述べた樣に、知るといふ中にも、私は種々の立場の區別をしたいと思ふ。カント哲學では知るといふのは形式によつて質料を統一することであると考へる、之を對象的認識といふ。認識するといふには認識主觀といふものが考へられねばならぬ、カント哲學では之を意識一般といふ。併し意識一般の立場に於て構成することゝ、かゝることを反省することゝは別でなければならぬ。又同じく知識を反省すると云つても、種々の知識について、單にその對象的形式を明にして行くといふことゝ、認識作用其者の内に反省して行くといふことゝは違ふ。カントの意識一般といふ如きは、後者の意味に於て自覺の純化したものである。カント以上に尙如何に純化して行つても主觀といふ意義が殘らねばならぬ、認識主觀其者と對象的形式、卽ち形

式其者とは區別することができる。かゝる區別は何處から起つて來るのであるか、之を區別する主觀は如何なるものであるか。それが又論理的主觀であるとするならば、さういふ論理的主觀と論理の形式とは如何なる關係に於て立つか。例へば肯定と否定とを統一するものは何であるか、それは又論理的形式によつて認識するとは云はれまい。それは論理的認識の限界であると云はれるかも知れないが、限界といふことは一層高次的なる立場を認めることによつて可能となるのである。始から知るといふことゝ、知ることを知るといふことゝの區別を明にせないためかゝる自家撞着を生ずるのである。

意識一般といふのは我々の主觀を極限にまで押し進めたものでなければならぬ、全然心理的主觀の意義を沒却したものでなければならない、無論それは存在するものではない。併し主觀の性質的差別は極限に至つても消え失せるとは云はれない。然らざれば論理的規範意識と倫理的規範意識と區別することもできない。元來兩者共に我々の自覺の意識から出立したものと考へるの外ないが、その極限に至つて各自別箇の主觀となるのであるか。主觀を何處まで押し進めて行つても、主觀とか意識とかいふ意義を脫することはできない。苟も主觀とか意識とかいふ意義を脫

する能はざるかぎり、主觀と主觀との關係が極限に至るの故を以て變すると考へ得るであらうか。對象認識の論理的主觀を何處まで押し進めても、意志主觀がその下に入つて來るとは考へられない、判斷主觀の下に意志主觀が從屬する樣になるとは考へられない。意志主觀及びその對象界をも包むと考へられるものは、實は判斷主觀といふ如きものではなくして、主觀其者卽ち自覺といふ如きものではなからうか。一體知識は單に形式によつて構成せられるのではなく內容との結合によつて成立するのである。かゝる結合は唯自覺の立場に於てのみ可能である。同じく所與と云つても知識の種類によつて異ならねばならぬ。時間、空間、因果といふ如きものは、唯自然界の所與の範疇に過ぎない。作用の方面に於て、理解力と知覺とを結合するものは自覺である。併し右の如き所與による對象界の中に意志の對象界は入つて來ない。意志の對象界が構成せられるには異なつた所與がなければならぬ。例へば、人と人とが互に直感する感情移入の如き直接所與がなければならない、而してそれは自然界の所與たる知覺とは異なつたものでなければならない。

自覺といふ語はすぐ心理學的と考へられるかも知れぬが、一體心理學的とは如何なる事を意味するのであるか。若し意識自身の自省といふ如きことをも心理學的

と云はれるならば、知識があると云ふ事から出立するといふのも心理學的ではなからうか。私の自覺といふのは所謂心理學的自覺を意味するのではない、意識自身の自省をいふのである、心理學的自覺といふ如きものは此の立場に於て見られるのである。斯く云へば又それが宇宙の自覺的精神といふ如き形而上學的實在であるかの樣に考へられるかも知らぬが、自覺は超越的に存在するものではない、超越的に存在するものならそれは自己意識といふものではない。意識を論理的と限定すれば、それより外のものは皆超越的となるかも知らぬが、それでは知識があるといふ如きことは、何處から出て來るのであるか。知識があるといふことから出立して考へられた認識主觀が、心理的ではない、形而上學的ではないと云ひ得るのは、心理的主觀を超越して心理的認識作用の根據となり、而もそれは意識を超越した形而上學的存在でないと云ふことでなければならぬ。意志自由の意識といふのも單に心理現象として考へ得るものではない、而して自由の自覺なき意志は意志でない。意志主觀は心理的意志現象に超越し、後者は却つて前者によつて成立するものでなければならぬ。而も意志の自覺も何處までも意識に內在的でなければならぬ。神の意志は私の自覺的意志ではない。認識主觀といふものが單に知識の形式といふ如きもので

なく、苟もそれが主觀とか意識一般とかいふ意味を有するかぎり、知識自身の自知といふものがなければならぬ。知識があるといふことは知識の自知といふことを含んで居なければならぬ。無論それは私が知識があると知るといふ如き心理的自覺とは離すことができるであらう。併し知識があるといふことは單に對象があるといふことでなく、否眞理自體があるといふことでもない。知識があるといふには、主觀を入れて來なければならぬ。かゝる主觀が意志をも對象として知り得るといふならば、それは自覺的でなければならぬ。單に論理的なる認識主觀であるならば、その眼界に意志は入つて來ない。一體、眞理自體があるといふことも單に對象自體があるといふことゝは違ふのである、況して誤謬といふ如きことは、否意味といふことすら、判斷主觀の自省といふことなくして考へられないのである。

私は對象化せられた心理的意志を判斷主觀の上に置くのでもなく、又內から働く神祕的能力を意志と考へるのでもない、判斷主觀よりも尙一層深き主觀を意味するのである、自覺についても同樣である(今日から見て不完全ではあるが既に「自覺に於ける直觀と反省」や「意識の問題」にも論じて居る)。知るといふことが單に心理學的に成立せない如く、さう單に心理學的に考へては、意志や自覺が成立せないのである。主觀といふ意味を深く

考へられるならば、かく考へればならぬと思ふ。意志は單に働くものでない、働くことを知るものである。自己は單に存在するものでない、存在することを知るものである、認識主觀の外にあるのではない、認識主觀が之に於てあるのである。知るといふことを知るのも認識主觀だと云はるれば、私は唯語義の問題だと思ふ、直にそれを判斷主觀の如くに考へるのは當を得ない。それならば自覺の自覺、判斷の判斷の又判斷といふ如く際限がないではないかと云はるかも知らぬが、それは空論に過ぎない。我々は零の零を考へ得ざる加く自覺の自覺といふ如きものを考へることはできない。

四

內容なき思想は空虛であり、概念なき直覺は盲目であると云つたカントは、知識の客觀性を內容と形式との統一に求めた、感覺の制約といふことはカントの重要視した所である。然るに今の西南學派の人々は深く此點を顧慮して居ない。カントの純粹統覺は單に論理的主觀といふ如きものではない。所與の範疇たる直覺の形式によつて與へられた內容と結合したものでなければならぬ。コーヘンはKants Theorie der Erfahrungに於て此點に着眼した。此故に思惟意識其者の自省から生產的思惟の考に至り、遂に感覺をも思惟によつて要求せられるものとして、オンに對するメ

ー・オンと考へた。私は何處までもコーヘンの考に同意するのではないが、斯くしてこそ構成的思惟としてのカントの純粹統覺の意味は徹底し得ると思ふ。然るにリッケルトの如く考へるならば、構成的主觀としての意識一般の意義は失はれ、之に代ふるにボルツァーノの眞理自體の如きものを以てせられ、意識一般は單に判斷意識といふ如きものに狹められた。如何にして超越的價値なるものが我々の思惟に對して當爲となるのであるか、對象自體といふ如きものが何故に我々に眞理として承認せられなければならないのであるか。眞理などいへば云ふまでもなく、價値といふも既に主觀的意味を有つて居るのではないか。單に判斷の形式に對しては、內容は無關係でなければならぬ。何故に全然主觀を超越したものが判斷作用の目的として主觀を制約するのであるか。若し範疇的に構成せられたものが判斷の對象となると云ふならば、範疇的に構成するものは何であるか。それがカントの意識一般の如く構成的、少くも綜合統一的主觀の意義を有するものでなかつたならばカントのコペルニクス的廻轉の意義は失はれてしまふではないか。

嚴密に對象自體といふ如きものから出立すれば、意識一般との結合が困難となり、何處までもカントの立場を徹底して行けば、構成的主觀を認めねばならない。而も

かゝる構成的主觀と單なる判斷主觀とは直に同一なるものではない、構成的範疇と反省的範疇と異なる所以である。然るに何によつて兩者は共に主觀といふことができ、相互に相關係することができるのであるか。かゝる主觀と主觀との內面的關係を求め得るには、深く我々の自覺的意識の內に省みるの外はない。判斷的意識も自覺的意識の一面である、併しその全體ではない、況して自覺其者ではない。自覺は所謂主觀の主觀、所謂意識の意識でなければならぬ、限定せられた或一つの主觀に對して、之を包む全主觀によつて構成せられたものが客觀的對象界として對立するのである。カントが經驗界の構成的主觀と考へたものは、知覺と思惟との綜合的主觀であつた。判斷主觀は自己を包む全主觀の對象界に知識の客觀性を求めねばならぬのである、自己の目的を見出さねばならぬのである、(私が嘗て直觀と反省との統一たる自覺を基として論じたのもかゝる考に外ならない、心理學を基礎とするとか、形而上學を說かうとしたのではない)。

カントの形式主義は單に判斷意識の形式を說いたものではない、カントは所與の原理を說いて居る、而して兩者の統一として客觀的知識を構成するものを、純粹統覺たる知的自覺に求めた。斯くして眞に如何にして知識は可能なるやの問題に答へ

得ると思ふ。リッケルトの認識論は唯知識の構成原理としての判斷意識を明にするに止まる。知識の客觀的根據として極力對象の必要を說くも、それは唯その必要を說くのみである、唯對象に打附つからねばならぬと云ふに過ぎない、所與の原理といふものは顧みられて居ない。かゝるものを論ずることが、すぐに心理學的になるとか、形而上學的に陷るとか考へて居る樣である。無論知識の特殊的內容を說明するものは認識論の外に出るであらう。併し客觀的知識が內容との結合によつて成立するとするならば、所與の原理の根據が明にせられねばならぬ、然らざれば眞に客觀的知識の構成原理を明にし得たとは云へない。知覺が直に知識でない事は云ふまでもないが、無內容なる判斷も亦知識ではない。カントの經驗界について云へば、知覺作用といふものがかゝる所與の原理となるのである。客觀的知識の範疇は、此の場合、思惟と知覺との兩作用を統一する主觀の形式として明にせられるのである。それがカントの所謂意識一般であつて、私が作用の作用として自覺的と考へるものである。かゝる意味の主觀の立場に於て、客觀的對象が範疇的に構成せられて居るといふことができ、形式と質料との對立が考へられるのである。作用としての知覺の構造を反省することなくして、所謂所與の範疇といふ如きものを明にすることは

できない。單に判斷意識の內から對象に打附かるといふだけでは、かゝる範疇は出て來ないのである。かゝる客觀的知識構成の原理として知覺作用の構造を明にすることが或は心理的と考へられるかも知らぬが、判斷意識其者を自省して知識の構成を論ずることが、既に單なる對象的認識の立場ではなくして、作用の意識の立場ではないか。知ることを知るのも、知ることであると云つても、前の知るといふことゝ、後の知るといふことゝは、知るといふことの意味が異なつて居るではないか。判斷の形式のみを考へれば、同じでもあらう、併し單に判斷の形式に當嵌まるといふことが知るといふことではない。作用的意識の反省の立場を、判斷意識の反省にのみ限らねばならぬといふ理由は何處にあるか。理論理性の自省である認識論は單に判斷意識の自省ではなく、知識の自省でなければならない、之を單に形式的なる判斷意識に限らうとするのは die blosse dogmatische Beschränkung der Erkenntnistheorie ではないか。

カントは所與の原理として唯知覺作用といふものを考へた、所謂自然界の知識構成としてはそれでよいのである。思惟の範疇と直覺の形式との結合によつて所謂經驗界構成の先驗的原理が與へられ、かゝる經驗の所與なくして徒らに推理を進め

ることは、認識の限界を越えるといふことができる、知覺の所與によつて明に自然科學的知識の限界は限定せられるのである。併し此場合、形式と內容とを統一して、知識の客觀性を樹立する認識主觀は何であつたか。カントの意識一般は單なる判斷主觀ではない、單なる判斷主觀の立場に於てかゝる統一を說くことは不可能である。單なる形式的判斷主觀を超越的なる對象界の統一にまで押し進めて行つてもその性質が變らねばならぬ、然らざれば、同じ袋をいかに內から押し廣げても同一の袋たるを免れない。カントはかゝる統一を知的自覺に求めた、カント哲學の眞髓は此にあると思ふ。私はカントの此立場に立つて深く自覺的主觀の意義を考へて見たい。我々の自覺といふのは作用と作用との直接結合の意識である。此故に自覺に於て、判斷と知覺とか直接に結合すると云ひ得るのである。若し我々の眞の自覺を斯く考へるならば、自覺的意識の立場に於て所與の原理と考へられるものは、單に知覺的意識にのみ限定し得るであらうか。作用の意識としては、意志の意識も知覺の意識と同樣に直接である、意志によつて與へられる直接の意識內容がなければならぬ。かゝる意志的意識の所與は知覺によつて與へられるものではない。例へば、衝動といふ如きものであつても、既に知覺ではない、況してリップスの所謂感情移入の對象

界といふ如きものは、知覺によつて與へられるものではない。無論知覺が直に概念的知識と云ひ得ざる如く、意志が直に概念的知識といふことはできない。併し知識の客觀性が單に判斷の形式によつて立せられるのではなく、直接所與の內容との結合によつて立せられるとするならば、直接所與の內容の異なるに從つて認識の形式も異なつて來なければならぬ。知覺的所與との結合によつて所謂自然界が構成せられるならば、意志的所與との結合によつて、之と異なつた對象界が構成せられなければならぬ、所謂文化の世界といふ如きものも斯くして構成せられるのである。單なる論理の形式によつて、異なつた對象界は構成せられない、意志の所與が少くとも知覺の所與と同樣に直接と考へられるが故に、自然科學に對立して、別の經驗科學として文化科學が立せられるのである。カントの意識一般は思惟と知覺との結合であつた。之を知覺の結合から自由にするのは、私の同意する所である。併し之を單なる判斷主觀とするならば、客觀的知識の主觀たる意味は失はれてしまはなければならぬ。

右の如く意志的體驗も知覺と同列的に所與の意識として、判斷主觀に對して質料を與へると云ふのみならば、判斷主觀が最高の位置に立つものであつて、意志の優位

といふ如きことは何處から出て來るかとも云ひ得るであらう。單に形式的なる判斷主觀の立場に立ち、客觀的知識の認識主觀の立場に立たないなら、對象はすべて一樣に價値とか當爲とかいふものであつて、その間に何等の區別もできないであらう。知識は形式と內容との結合によつて成立し、兩者統一の主觀が眞の認識主觀であるとするならば、此立場に於て卽ち私の所謂自覺的立場に於て、單なる形式的判斷主觀と所與の意識とが如何なる關係に立つかを明にすることができなければならぬ。判斷意識と知覺との關係は意志と判斷意識との關係に同一ではない。判斷主觀が知覺に結合するといふことゝ、意志に結合するといふことゝは、判斷主觀其者の立場から見ても同一ではない、限定的判斷作用と反省的判斷作用とが區別せられる所以である。云はゞ一つは對象を前に見、一つは對象を自己の背後に見るのである、一は自己の前から與へられ、一は自己の背後から與へられるのである。知覺的內容といふものは一般概念的に限定せられたものであるが、意志的體驗の內容は論理によつて限定せられるものではない、却つていつも之を破るものである。此故にカントの如く認識主觀を判斷と知覺との結合に限定すれば、意志の內容といふ如きものは知識の內に入つて來ない、文化科學といふ如きものでも嚴密なる意味に於ては知識で

はなくなる。單に判斷意識の內に閉ぢ籠つて內容との關係を顧慮せなければ、二種の科が同樣に見られるかも知らぬが、判斷的知識の本質が、限定せられた一般概念の上に立つといふ見地よりすれば、自然科學と文化科學とは同列的ではない。私はカントの認識主觀の意義を判斷主觀に狹めることによつて、知覺との結合から自由にするのではなく、寧ろ之を廣めることによつて、文化科學をも客觀的知識と考へたいのである、卽ち所與の原理を知覺に限るといふことから認識主觀を自由にしたいと思ふのである。所與の原理は異なるも、形式と內容との統一たる認識主觀の下に於て、兩者共に經驗科學と云ふことができ、共に客觀的知識と云つて差支ない。併し所與の原理の異なるが故に概念的知識としては同位的ではない。眞の認識主觀を單なる判斷主觀ではなく、カント自身の考へた如く形式と內容との統一の主觀とするならば、所與の原理と共に認識主觀の意味が變つて來なければならぬ。知覺と思惟との統一たる知的自覺なくして自然界が成立せない如く、意志の自覺なくして意志の對象界は成立せない。意志の自覺なくして、文化科學の根本概念なる個性の概念も成立せないかと思ふ。而して意志の自覺は知的自覺と同じく直接である、否却つて一層深い自覺である。我々は自覺の立場を深めて行くことによつて、一層深い對

象界を見得るのである。單に判斷主觀の立場のみに立つて居れば、すべてその外より與へられるものは神の所爲とでも考へるの外はないのである、知覺的所與といふことも神爲といふの外はないではないか、所與の範疇といふものは何處から成立するのであるか。カントの物自體を知覺の根抵に考へられねばならぬ超越的對象の意味に解するならば、それは、排除すべきではなく、却つて認識構成に缺くべからざるものでなければならぬ。私が意志の優位を說くと考へられても、それは情意に基く信念の如きものを以て客觀的知識の上に加へようと云ふのではない、さういふことは一度も考へたことはない。私の考では、意志的體驗は知覺のそれの如く直接の所與である、而もそれは知覺より一層具體的なる所與であつて、知覺的所與の範疇の內に入つて來ない。私は今知覺と意志との意識的構造について詳論する暇はないが、知覺の內に意志を包むと云ひ得ないが、意志の內には知覺を包むといふことができる。意志の對象界は所謂自然界よりも一層深い認識主觀によつて構成せられると考へるのである。無論意志の體驗其者を思惟の形式と內容との結合たる認識主觀の立場に於て對象化することはできぬ。その所與が意志的であつても、認識主觀が判斷意識との結合を條件とせねばならぬかぎり、意志其者を此立場に於て認識する

とは云ひ得ない、此意味に於て意志は全然知識を超越すると云ふことができる。我々の所謂自覺の意識といふのは思惟の形式と經驗內容との統一である、かゝる自覺的統一の根抵には却つて意志の意識がなければならぬ、意志の意識なくして知的自覺は成立せない。カントの純粹統覺がフイヒテの事行に到らねばならなかつたのも此故である、單にそれが形而上學に墮したとのみ考へることはできない。知的自覺は意志的自覺に於てあるが故に、意志的所與が知覺的所與より深きものと考へられるのである。我々の自覺的立場を深めて行くに從つて、所謂自然界以上の對象界を見ることができる。唯我々の自覺は無限の深底であり、自覺の意識其者をも失ふ所に、眞の自覺があるのである。自覺の意識の存立せられるかぎり、尙認識主觀の意義を有し、何等かの意味に於て對象界が見られるのであるが、之を越えれば、全然所謂知識の領域を脫して、直觀の世界に入る、而してそこに眞の自覺が現れるのである。私は此の如き意味の直觀を知識の極限として、概念的知識ではないが、眞の知識と考へると共に、知識成立の根本條件とも考へるのである。

五

以上の考は「自覺に於ける直觀と反省」以來、既に私の抱く所である。カントの純粹統覺を形式と內容との統一によつて、知識の客觀性を樹立する眞の認識主觀とするならば、それは單なる直覺的主觀でないと共に、單なる論理的主觀であることもできない。此の如き綜合統一の主觀を求むれば、我々の自覺の外ない、自覺に於ては、考へるものと考へられるものとが無條件に一であるのである。我々はすべての客觀的知識の根據を此に求めざるを得ない、此點に於て私はフイヒテが Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre の始に於て、Erster, schlechthin unbedingter Grundsatz として Tathandlung を考へたのは、カント哲學の深い見方と云はざるを得ない。フイヒテの云ふ如くそれは意識には現れない、又現れることもできない、併しすべての意識の基礎となるのである。認識といふことも之によつて基礎附けられねばならないのである。

知的自覺とは思惟と直覺との綜合、所謂知識の形式と內容との統一を意味するに外ならない。かゝる統一の純なる形式的言表が Ich bin ich であるのである。それは心理學的でもなければ、形而上學的でもない、認識論が之によつて基礎附けられるのである。認識主觀の意義を藏せざる自覺はない、所謂心理的自覺といふのは、かゝる意味に於ける自覺の內容的に限定せられたものに過ぎない。恰も思惟は單に心理

的ではないが、限定せられた判斷作用として心理的と考へられるのと同樣である。或意識の範圍內に於て思惟と內容との統一が見られるかぎり、心理的知的自覺が考へられるのである。リッケルト派の認識論者は先驗心理學的反省によつて抽象的思惟の主觀を許しながら、何故に具體的思惟の主觀たる自覺的主觀を眞の認識主觀として之を認めないのであるか。知識があると云ふことは、知的自覺によつて可能なるのである。認識論が眞に知識の成立を明にせうと思ふなら、かゝる自覺の問題に入つて行かなければならぬ。かゝる問題に入り込むことが、すぐに形而上學に陷ると考へられるかも知れぬが、上にも云つた如く形而上學的實在として自覺といふものが考へ得るであらうか。自覺的主觀は何處までも內在的でなければならぬ、內在的でない自覺的主觀といふ如きことは、自家撞着である。此の如き自覺の背後に本體といふ如きものを考へるならば、それは形而上學に陷ると云つてもよい。併し自覺の背後に此の如き形而上學的本體が考へられるならば、自覺の自覺たる所以を失はなければならない。フィヒテの自覺といへども、決して此の如き意味に於て形而上學的ではない。リッケルトの樣に認識主觀を形式的な判斷主觀に限定するならば、それ以外のものは、すべて超越的と考へられるかも知らぬが、斯く云ふならば、形

式と內容との統一たるカントの純粹統覺といふ如きものも超越的主觀と云はねばならぬ。知識の客觀性の根據すら十分に說明できない判斷主觀に限定して、それ以上に出ることを許さなければ、一種の獨斷的認識論と云はれても致方ないではないか。カントが形而上學として排斥したのは、我々の經驗界を構成する範疇を、知覺的所與なくして超經驗界に押し進めることであつた。私はかゝる意味に於て、形而上學的に陷つたことは一度もない。フィヒテ以後の哲學もかゝる意味に於ての形而上學ではない。フィヒテはカントの先驗的演繹の問題に深く入つたのではないか。カントの認識主觀を深く考へるならば勢かゝる問題に入るのも自然の勢である。フィヒテは思索の翼に乘り過ぎたと云ふこともあらう、又私は單にフィヒテの立場に據るものではない。併し認識主觀として自覺の問題を深く考へて行くことが、直に形而上學に陷ると云ふことは、リッケルトの如く一脚的認識論を固執せない限り、云ひ得ないことである。カントに還れと云はれるなら、カントに還つてもよいが、リッケルトのカントではなく、カントのカントに還つて尙一應考へて見たい。

眞の認識主觀は思惟と廣義に於ける直覺との統一でなければならぬ、眞の知識は形式と內容との統一にあるのである。かゝる主觀はリッケルトの云ふ如き單なる

形式的判斷主觀ではなく、自覺的主觀でなければならぬ。カントも知覺と思惟との統一を此に求めた、フィヒテに於ては更に此點を深めて事行の考に到達した。私はフィヒテ及びフィヒテ以後の獨逸唯心論の批評に入り込む暇はないが、何處までもカントの認識論的立場を維持して形而上學に陷るを避けるには、認識主觀としての自覺の意義を失はないことを務めねばならぬ。自覺の背後に存在的自己を考へる如き事は、形而上學に陷るのは云ふまでもなく、之を純なる作用と考へるのも既に認識主觀の意義を失ふ恐あるを免れない。フィヒテの働く事が知る事であるといふのは、無論內在的自覺の深い意義を云ひ顯はしたものではあるが、客觀界構成主觀としてのカントの認識主觀の意義を徹底した結果、その主觀的判斷主觀の意義を失ふ如き傾を生じたのではなからうか。無論、フィヒテの我は反省的思惟をその契機として含むものであらう。併し客觀的思惟に主觀的思惟が含まれると考へられる時、それは客觀的精神として形而上學的傾向を帶びる嫌を生ずるを免れない。意識の背後には何物をも考へられない、何物かの上に立つならば意識ではない、意識は何處までも直接でなければならぬ。何等かの意味に於て對象化せられたものは意識ではない、心理學的意識の如きは意識せられたものに過ぎない。事卽行にして無限の

過程と考へられるフィヒテの事行は、客觀的思惟としての自覺の構成作用を言ひ表すに十分であらう。而してそれが自覺的なるが故に反省作用といふ如きものをも含むことができる、併し眞に直接なる反省的意識其者を含むといふことはできない。純論理的ではあるが、既に動的なる過程といふ如きものが考へられる時、既に對象化せられたと云ふことができる。此故にかゝる立場から嚴密に論ずるならば、眞の意志の自由といふ如きものは出て來ない。我々に眞に直接なる反省的意識は、かゝる意味に於ける作用的なるものをも越えて、無限に深い奥に還らねばならない。無論フィヒテは既に事行の立場を越えて、シェルリングに近い知的直觀の立場に進んだと云ふことができる。併しシェルリングの知的直觀であつても主客合一と考へられるかぎり、尙對象的意義を脱し得たといふことはできない。

是に於て、私は從來認識論の基礎となつて居る知るといふ概念を問題とせざるを得ない。常識的には、先づ心と物とが相對立し、知るといふのは心の働きと考へられる。かゝる考の極めて素朴的なるは云ふまでもないが、認識論者といへども、洗練して居るとは云へ、徹底的にかゝる考を脱却して居るとは云へない、かゝる考に對して十分に批評的であると云へない。主客の對立を前提として、知るといふことを主觀

の構成作用と考へるのは、尙作用といふ考の垢が全然拭ひ去られたとは云へない。無論作用といつても、何等かの意味に於て時間的なるもの、主觀と云つても、何等かの意味に於て實體的なるものは、何處までも洗ひ去られたであらう。併し認識主觀といふものを、何處まで押し進めて見た所で、その性質が根柢的に變する譯ではない、つまり我々の認識作用の內に含まれて居る對象的關係の方面を、極限にまで押し進めたと云ふに過ぎない、全然之を超越すれば、主觀といふ意義もなくなるのである。此故に私は全く從來の考を棄てゝ、純眞に判斷意識其者の自省から出立して見たいと思ふ、判斷意識から出立して、主客の對立が如何にして考へられ、知るといふことが如何なることを意味するかを明にして見たいと思ふ。判斷作用といふものから出立すれば、尙碎いて考ふべき作用といふ概念が何處までも殘されるのである。かゝる考からして私は一般の中に特殊を包攝するといふ包攝判斷から出立した。而してアリストテレスのヒポケーメノンの考に基いてすべて、客觀的なるものを主語にとつて述語とならない第一本體に求めた。私は此の概念によつて判斷的知識の基礎となる客觀的なるものすべてを、最も廣義に且つ明瞭に定義し得ると思ふ。肯定否定といふことから出立すれば、客觀的なるものを價値と考ふべきであらうが、それは

判斷作用を基とした考であるから、かゝる考を去つて、判斷に客觀性を與へるものは、アリストテレスの如く主語となつて述語とならないものと考へるの外はない。アリストテレスの第一本體など云へば、又すぐに形而上學的と考へられるかも知れぬが、單に右の如く考へられたヒポケーメノンに何等形而上學的意味はない。以上の如く客觀的なるものを主語となつて述語とならないヒポケーメノンに求めると共に、私は之に反し主觀的なるものを述語的方面に求めた、卽ち述語となつて主語とならないものを意識と考へた。私の所謂場所とはかゝるものを意味するに外ならない、プラトン學派に於けるイデヤの場所といふ語に基いたものである。右の如く考へる事から、判斷といふのは特殊なるものが一般なる場所に於てあると云ふことゝなる、而して述語となつて主語とならない超越的場所の立場からして、それは知るといふことゝなる、これが知るといふことの根本義である。知るといふことを作用と考へる立場からすれば、知るといふことは形式によつて質料を綜合統一することゝ考へられ、主觀とはその統一者といふ如くに考へられるであらう。併し此の如き考は、尙主客相對立して、働くとか變するとかいふ考の殘瀝を洗ひ去つたものではない。斯くの如き考は尙主觀を對象的に見て居るのである、作用といふ如き考を如何に純

化して行つても、一種の範疇を極限にまで進めたといふことゝなる。眞の認識主觀は私の所謂超越的場所といふ如きものでなければならぬ、すべてを包むものでなければならぬ、所謂主客の對立も之に於てあるものでなければならぬ。

右の如く包攝判斷の述語面が述語となつて主語とならないと考へられた時、それが私の所謂場所として意識面であり、之に於てあると云ふことが知るといふことであると云ふのが、私が「場所」の論文に於て到達した最後の考である。種々なる知るといふことの意義及びそれぞれの對象界は、此の場所の意義によつて定つて來るのである。場所が何等かの意味に於て判斷の述語として限定せられ得るかぎり、卽ち一般的なるものが限定せられるかぎり、我々の意識面に於いて判斷的知識卽ち所謂知識が成立つことができる。之を越ゆれば直觀の世界に入る、私の眞の無の場所といふのはかゝるものを意味するに外ならない。作用といふ考は「働くもの」に於て論じた如く、或限定せられた述語的一般者が判斷の主語として考へられ得る場合に於て成り立つのである。更にそれが述語となつて主語とならないと考へられた時、卽ち單に限定せられた場所と考へられた時、それは意識面となる、故に意識面は常に作用を包んだものである、具體的一般者を包む反省的一般者が意識面である。意志作用

といふのは、述語的一般者によつて限定せられると云ひ得る最後の場所、卽ち最後の知識の場所に於て、かゝる場所をも越えた眞の無の場所に於てあるものを見たものである。眞の無の場所に於てある主客合一者、卽ち自己自身を見るものが、カントの意識一般の對象界といふ如きものに映されたのが意志である。故に知的自覺の底には意志的自覺が見られ意志的自覺の奥には自己自身を見るものがある。論理的に云へば、全然意識一般の立場を越えたもの、卽ち自己自身を見るものが、意識一般の立場に於て述語を有つ時意志といふ如きものが考へられるのである。

判斷的知識の成立するには、いつでもその根柢に何等かの意味に於ける一般者がなければならぬ。純粹に思惟による知識と考へられるものには、明に限定せられたる一般者がある、例へば幾何學に於ては空間といふ概念がそれである、之をその學問のアプリオリと云つてよい。「働くもの」に於て論じた如く、意識一般の立場によつて成立すると考へられる所謂經驗界の知識に於ても、それが判斷的知識と云ひ得るかぎり、その根柢に一種の一般者が考へられねばならぬ。併し此場合に於ける一般者は、幾何學に於ける空間の如き意味に於て、限定せられたものではない。例へば、經驗界構成の根本的範疇として、時といふものについて考へて見よう。時は單に直線的な

ものではない、アウグスチヌスが過去も未來も現在に於てあると云つた如く、時の背後にも一般者がなければならぬ。併し時の背後に考へられる一般者といふ如きものは、積極的に考へられるものでなく、消極的に考へ得る一般者である。我々の知識はいつでも現在より出立する外はない、かゝる場合、特殊が一般を含むと云つてよい、コーヘンの生産點といふ如きものもかゝるものを意味するのである。唯かゝる一般者に於てあるものも、尙判斷的知識と考へられる所以は、現在との關係に於て消極的であると云へ、限定せられ得る一般者が考へられるからである。併しかゝる否定的一般者をも超越した時、眞に判斷的知識を超越したと云ふことができる、これ以上意志とか直觀とかいふ所謂超概念的知識の世界に入るのである。一般と特殊との關係から云へば、特殊的方向を何處までも押し進めて行き、時の如きものに於ても、既に特殊が一般を含むと云ひ得るが、その一般者は尙否定的に限定し得るものであるから、更に之をも越えた時、眞に特殊が一般を內に包むと云ふことができる、卽ち如何なる意味に於てでも、苟も概念的に限定し得る一般者ならば、之を內に包むと云ふことができる、意志は自己の中に自己の否定を包むものである。併しかくの如き限定的一般者を越えて之を內に包むと云ふべきものであつても、尙我々は之を意識に於

てあると云ふことができる。何となれば、我々の意識といふのは、上に云つた如く述語となつて主語とならない、超越的述語面といふ如きものを意味するからである。我々の概念的知識が特殊化せられて行くに從つて、一歩進んだ特殊は前の一般的なるものを内に包んで行く、最後に如何なる意味に於て苟も概念的に限定し得られる一般的なるものが、全然内に包まれた時、判斷の主語述語の關係から尙眞に無の場所といふものが考へられる、卽ち眞に思慮分別を絕した眞に直接なる心といふものが殘るのである、かゝる場所に於てあるものが、眞に直覺的なるものである、自己自身を見るものである。かゝる無の場所といふものが、何等かの意味にて一般概念的に限定せられるかぎり、一種の意識面が限定せられ、之に於て概念的知識の世界が成り立つのである。判斷的知識と直覺とは、此の如く場所の關係に於て連結して居る、後者は眞の無の場所、卽ち場所其者であつて、前者はその限定せられたものである。此故に直覺的なるものが判斷的知識に入り來ると云ふことができる、無論直覺的なるものが、その儘にて判斷の中に入り來ると云ふのではない、場所が限定せられるかぎり、之に映するのである。故に判斷的知識はいつでも抽象的なるを免れない、眞に具體的なるものは直覺的なるものとして、眞の無の場所に於てあるのである。眞の認識

主觀といふのは、かゝる意識の場所といふ如きものでなければならない、私は向に認識主觀に種々の階段があると云つたのは、之によつて明にすることができる。カントの認識主觀は尙限定せられた場所に過ぎないが、眞の無の場所に入るに從つて、意志の世界、直覺の世界が見られるのである。意志の世界と直覺の世界との區別については、我々が直覺的と考へるものは、最終の無の場所たる眞の無の場所に於てあるのである。意志は尙全然カントの意識一般の立場との關係を脫却しない、意識一般の場所と眞の無の場所との間には、種々の階段を考へることができる、種々なる無の場所があるのである。合目的的世界から心理學的對象界、心理學的對象界から歷史的世界といふ樣に、漸次に所謂意識一般の立場を包んで最後に自由意志の世界に至る。遂に自由意志の世界をも超越した時、全然意識一般の立場を脫却して眞に直覺の世界に入る。此の場所に於てあるものは、全く知識の意味を失つて、意識一般の對象界に於ては、唯表現として見られるまでである。

以上述べた如く、私は判斷意識を根柢として、之から出立したいと思ふ。併し私の判斷意識といふのはリッケルトのそれと同一ではない。リッケルトの判斷意識といふのは、先づ主客の對立と考へ、知るといふことを作用と考へる心理學的な考を基

としたものである。而してその認識主觀といふのは、カントの認識主觀から所與の原理を除去して單に形式的に考へられたものである。之に反し知的作用といふ如きものゝ根柢に横たはる作用といふ如き考を除去して、作用といふ如きものが、既に對象化せられたものと考へ、知るといふことを尙一層深く廣い意味に解して、意志の意識、直覺をもその内に含めたいと思ふのである。普通に知的作用と考へられるものは、向に云つた如く、意識一般の對象界と意志、直覺の世界との間に見られる心理學的對象界に於ける一つの特殊なる場合に過ぎない。私の場所といふのは、單に所謂一般概念といふ如きものではなくして、特殊が於てある場所である、對象を内に映して居る鏡の如きものである。かく云へば、鏡と對象とが別のものと考へられるかも知らぬが、一般が特殊を自己自身の限定として、之を自己の内に成立せしめると共に、特殊に對しては何處までも一般其者として特殊とはならない、單に特殊が之に於てある無なる場所と考へられた時、自己の中に自己を映す鏡となるのである、我々が普通に用ゐる映すと云ふ語の根柢にもかゝる考が含まれて居なければならない。

カントの認識主觀については、リツケルトの如き考に反して、寧ろカント自身の考を維持したいと思ふ。唯カントも主客の對立を基とし、知るといふことを作用と考

へることから出立したことに對し、尙一層深く廣い立場から出立したいと考へると共に、カントの如く所與の原理を單に知覺に限りたくない。フイヒテによつて創められた獨逸唯心論的傾向については、私は今日のカント學派と稱して居る人々の樣に、單に之を形而上學として、無理解に排斥するものではない。唯今日の私には、その客觀的思惟方面を基として、主觀的思惟をその一面とのみ考へた所に、形而上學的傾向があると考へられ、私は何處までも判斷意識の立場を離れないで、具體的一般の背後にも場所として抽象的一般を考へることによつて、認識論的立場を維持したいと思ふ。それが die blosse metaphysische Übertragung der Erkenntnislehre と云はれるなら致方もないが單にリツケルトの如き立場以外に出ることを形而上學的と考へられるなら、私は寧ろ好んで光榮ある形而上學者の名を冒瀆したい。

六

以上は私の思想の根柢に對する博士の疑問に對して、私の立場を明にしたものである。私の無の場所といふのは、場所といふ如きものを對象的に考へて、それが有であるとか無であるとか云ふのではない。それが有であるとか無であるとかいふ樣

に述語することは、それを對象的に見ることである、かくの如く論じられ得るかぎり、それは私の所謂場所ではない。博士がかゝる疑問を提出せられるのは、始から私の場所といふのを形而上學的と定めて居らるゝ爲ではないかと思ふ。私の場所といふのは判斷的知識の由つて成立する一般者といふ如きものであつて、それが具體的一般者と考へられるかぎり、尙主語的であり、對象的であるが、上にも云つた如く、苟も判斷的知識が成立するかぎり、具體的一般者の背後に反省的一般者がなければならない。判斷としては、述語面は何處までも主語面を包むものであり、客觀的思惟の背後にも反省的主觀がなければならない。此の如き何處までも判斷的知識の背後に見られねばならない述語面といふ如きものが、私の所謂場所であつて、それはカント學者の認識主觀に相當するものと云つてよい。唯從來の考へ方の如く主觀を統一點といふ樣に考へないで、包容面といふ樣に考へる點に於て異なるまでである。之について、それが有であるとか無であるとかを論ずるのは、認識主觀について、それが有であるとか無であるとかを論ずると同樣である。私が無の場所といふのは、一般概念として限定せられないといふ意味に過ぎない。眞の無の又無がないかといふ如き質問に對しては、私は答ふる所を知らない。私は單に無の概念を弄して居るの

ではなく、述語面を意識面と考へ、概念的に限定することのできない最終の述語面が、所謂直覺的意識面であつて、之に於てあるものを、自己自身を見るもの、所謂主客合一なるものと云ふのである。直覺の又直覺がないかと云はれても、私はその意味を解することができない。

終に臨んで、博士が貴重なる時を割いて、蕪雜なる私の論文を精讀せられ、その犀利なる批評によつて、私の爲に多大の刺戟を與へられたことを感謝せざるを得ない。私の如きは日暮れて途遠きもの、博士の好意に報する所以のものを知らないが、希くば我學界、千金死馬の骨を買はんとせられる博士の志を空くせざらんことを。